慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇二〇年度修士論文要旨;二〇二〇年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2021
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.90, No.1 (2021. 9) ,p.113 (113)- 127 (127)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20210900-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇二〇年度修士論文要旨

〔日本史学専攻

戦国期伊達氏における対外交渉

外 佳祐

本論文は、戦国期伊達氏家臣が戦国大名間の交渉において果たした役割を検討したものである。伊達氏家臣の活動について、別を対象に外交担当である外交取次に注目して、伊達氏の対外原基信が果たした役割は必ずしも明確ではない。主に伊達輝宗制に「一家」「一族」に位置づけられている家臣の検討が行宗期に「一家」「一族」に位置づけられている家臣の検討が行宗期に「一家」「一族」に位置づけられている家臣の検討が行宗期に「一家」「一族」に位置づけられている家臣の検討が行為が、対域を対象に対して、世達氏家臣が戦国大名間の交渉において果本論文は、戦国期伊達氏家臣が戦国大名間の交渉において果

ることを指摘した。天正年間に輝宗は織田氏や小田原北条氏と元亀の変後には基信が上杉氏との取次を独占的に担う傾向にあが輝宗のもとで外交に関与していたことを明らかにした。また、越後上杉氏との交渉を題材に取り上げ、永禄年間には既に基信後して輝宗は遠藤基信を登用したとされてきた。これに対して後して輝宗は遠藤基信を登用したとされてきた。これに対して第一章では、輝宗期における南奥以外の大名との外交を検討

うという指摘があるが、輝宗期の伊達氏にはそのような傾向はいる。他の戦国大名では主に当主一門が遠国大名との交渉を行友好的関係を形成しており、その取次も基信が独占的に務めて

見出せない。

第二章では、輝宗期を通じて同盟関係にあった会津蘆名氏と第二章では、輝宗期を通じて同盟関係の強後に遠藤基信が取次として登場し、同盟関係の継続を確認する際にも交渉に携わったことを指摘した。和睦調停の交渉などでは基信以外の宿老も蘆名氏側の取次についても検討を行い、蘆名盛隆の時期に一門・宿老層と側近層の組み合わせで取次を形成していたことを指摘した。養父蘆名盛氏の死去と前後して外交関係の強化や交指摘した。養父蘆名盛氏の死去と前後して外交関係の強化や交渉の円滑化がはかられたものと考えられる。

でいることを指摘した。それに加えて元宗は当主親類として交でいることを指摘した。それに加えて元宗は当主親類として交高夫大森城を拠点としたことによる地理的条件が大きいと考えられ、杉目城に隠居した伊達晴宗にも同様の傾向を指摘できる。兵元以外の伊達氏の子息はその多くが他氏に入嗣している。そ実元以外の伊達氏の子息はその多くが他氏に入嗣している。そ実元以外の伊達氏の子息はその多くが他氏に入嗣している。そま元以外の伊達氏の子息はその多くが他氏に入嗣している。そま元以外の伊達氏の子息はその多くが他氏に入嗣している。 「郡主」に位置付けられている留守政景と亘理元宗を取り上げ、両者ともに地理的条件を背景に近接する他氏と外交関係を結んでいる記をを指摘した。それに加えて元宗は当主親類として交でいることを指摘した。それに加えて元宗は当主親類として交でいることを指摘した。それに加えて元宗は当主親類の外交活動について検第三章では、輝宗朝にないる。

の交渉では、基信ら宿老と当主親類・旗下などが重層的に取次ったのに対し、和睦交渉や仲裁交渉が多く見られる南奥諸氏とどまった遠国大名との交渉は、基信が取次を独占する傾向があ、以上の検討から、伊達氏との間に友好的関係を形成するにと渉内容を保証する役割をも担っていたと考えられる。

〔東洋史学専攻

を担っていたことを指摘した。

嘉禾吏民田家莂の作成主体について

住谷 広太

一九九六年に湖南省長沙市で出土した長沙走馬楼呉簡には、一九九六年に湖南省長沙市で出土した長沙走馬楼呉館には、高禾吏民田家前」と通称される二五四八枚の賦税類大木簡が「嘉禾吏民田家前」と通称される二五四八枚の賦税類大木簡が「嘉禾吏民田家前」と通称される二五四八枚の賦税類大木簡が「嘉禾吏民田家前」と通称される二五四八枚の賦税類大木簡が「高禾吏民田家前」と通称される二五四八枚の賦税類大木簡が「高禾吏民田家前の作成主体には、一九九六年に湖南省長沙市で出土した長沙走馬楼呉簡には、一九九六年に湖南省長沙市で出土した長沙走馬楼呉簡には、

報を記録した小型竹簡、所謂「賦税納入簡」に言及した。賦税備として、長沙走馬楼呉簡に含まれている吏民の賦税納入の情第一章では、嘉禾吏民田家莂の各木簡の属する郷の推定の準

嘉禾吏民田家莂の作成主体は県吏であり、その具体的な官職

登録先の郷の傾向を示していると述べた。だ明確でなかった。本論文は、賦税納入簡は丘毎の吏民の戸籍だ明確でなかった。本論文は、賦税納入簡は丘毎の吏民の戸除は未関係を示すと考えられてきたものの、その対応関係の意味は未納入簡は郷と吏民の居住地である「丘」との間の何らかの対応

第二章では、嘉禾吏民田家前の各木簡の属する郷を推定した。 第二章では、嘉禾吏民田家前の各木簡の属する郷の推定 をの対応する郷こそが各グループの木簡の属する郷だと述べた。 その対応する郷こそが各グループの木簡の属する郷だと述べた。 その対応する郷こそが各グループの木簡の属する郷だと述べた。 その対応する郷こそが各グループの木簡の属する郷だと述べた。 その対応する郷こそが各グループの木簡の属する郷を推定した。 まず、嘉禾吏民田家前の各郷の標題簡と対応する郷の木簡との で背の高さが一致することを示し、各木簡の属する郷を推定した。

家前の作成主体の官職は勧農掾だと述べた。
家前の作成主体の官職は勧農掾だと述べた。
宗前の作成主体のの官職は勧農掾だと述べた。続いて、嘉禾吏民田家前の作成主体に郷吏ではなく県吏だと述べた。続いて、嘉禾吏民田家前の作成主体に郷吏ではなく県吏だと述べた。続いて、嘉禾吏民田家前の作成主体に郷吏ではなく県吏だと述べた。続いて、嘉禾吏民田家前の作成主体である県吏の具体的な官職を検討した。そこでまれた文言のパターンが異なっていること、そして、長沙走載された文言のパターンが異なっていること、春日に、嘉禾吏民田家前の作成主体について論じた。ま第三章では、嘉禾吏民田家前の作成主体の官職は勧農掾だと述べた。

論文の結論である。 は勧農掾である。以上が嘉禾吏民田家莂の作成主体に関する本

〔西洋史学専攻

ベールデンストルム一五六六年のアムステルダムにおける

―聖画像破壊運動に関する一考察―

上田 悠貴

は、宗教史的にも政治史的にも、ネーデルランドの歴史におけな、宗教史的にも政治史的にも、スペーンエフェリペニ世は、異る。この出来事に衝撃を受けたスペイン王フェリペニ世は、異る。この出来事に衝撃を受けたスペイン王フェリペニ世は、異る。この出来事に衝撃を受けたスペイン王フェリペニ世は、異る。この出来事に衝撃を受けたスペイン王フェリペニ世は、異る。この出来事に衝撃を受けたスペイン王フェリペニ世は、異る。この出来事に衝撃を受けたスペイン王フェリペニ世は、異者を関係の最近にある。

ホラント州をはじめとする北部での破壊活動には、焦点が当たったネーデルランド南部の都市の事例を取り上げていた。一方、が、その多くはアントウェルペンなど、比較的被害が甚大であが、イルデンストルム全般については豊富な研究の蓄積がある

る重要な転換点となった。

た。考察している。その結果、二つの大きな要素が浮き彫りになっ考察している。その結果、二つの大きな要素が浮き彫りになっステルダムでのベールデンストルムを扱い、その背景についてることは多くなかった。本研究は、そうした都市の一つ、アム

はその求心力を著しく欠き、アムステルダムはハプスブルク政 健な改革派の有力市民の仲介を必要とした。このように市当局 を担う市民軍も敵に回していた。ベールデンストルムに際し、 政策は、かねて多くの市民の反感を買い、また市内の治安維持 要職の多くを占めていた。彼らの進める宗教面・経済面での諸 化を生んだ要因であった点を指摘した。当時のアムステルダム リック聖職者たちは厳しい批判の対象となった。教会や修道院 じる直前に、改革派説教師らが行った「野外説教」でも、カト その敵意はさらに膨れ上がっていた。ベールデンストルムが生 期から聖職者や修道士が有していた諸特権への反感が、 拒否された。また改革派の指導者との和解交渉では、彼らは穏 市当局は破壊行動を抑えるために市民軍の協力を要請するも、 市当局は、異端者への厳罰を支持する厳格なカトリック市民 の破壊行為も、こうした心性の現れであったことを示した。 のもつ免税特権と、それに伴う市民の経済的負担の増大により アムステルダムでは市内の修道院の急増とともに、次第に彼ら は聖職者たちの堕落や悪弊を批判するものであった。しかるに 間で醸成されていた。こうしたいわゆる「反教権主義」は、元 これに加え、暴動発生時における市当局の無策も、事態の まずアムステルダムを含むホラント州の諸都市では、 中世

った。

る議論を中心に――一八八六~九六年の「ウェールズ土地問題」をめぐ―一八八六~九六年の「ウェールズ土地問題」をめぐ「九世紀末イギリスの自由主義と

佐藤 まゆ子

本論文は、急進的自由主義者およびウェールズの非国教徒の本論文は、急進的自由主義者およびウェールズ・ナショナリランド及びイギリス帝国との関係が「ウェールズ・ナショナリズル問題」をめぐる議論のあり方、第二にウェールズ民族主義を考察するものである。研究では、第一にウェールズ民族主義を考察するものである。研究では、第一にウェールズ民族主義を考察するものである。研究では、第一にウェールズの非国教徒の本論文は、急進的自由主義者およびウェールズの非国教徒の

「ウェールズ土地問題」は、一九世紀後半の経済発展を受け加えた。

としていたと考えられる。 うに、ウェールズ民族主義者はイングランドとの合同続行を前 リス帝国との関係の違いによって、両者の土地問題やナショナ ンドの農村部の状況、両地域それぞれのイングランド及びイギ 的分断が民族的分断に置き換えられた記述が多く見られ、「ウ 級打破のために創造された側面が強かった。「土地問題」に関 九世紀末の「ウェールズ・ナショナリズム」は帝国意識を基盤 提とし、帝国意識は社会に広く共有されていた。このため、一 的であったと考えられる。一方、機関誌の記事中に見られるよ 義と結びついた「ウェールズ・ナショナリズム」の成果は限完 的や大衆の熱狂的支持の不在を考えれば、一九世紀末の自由主 ことなく挫折した。土地問題を推進した民族主義者の政治的目 義者が展開した「土地問題」観や「ウェールズ・ナショナリズ リズムの性質は大きく異なっていた。ウェールズでは、民族主 の政治的手段として用いられた。また、ウェールズとアイルラ ェールズ・ナショナリズム」は自由党が大衆の支持を得るため 地主が「イングランド化」した存在として描かれるなど、階級 する言説の中では、言語・宗教・政治的志向が借地人と異なる て台頭したミドル・クラスによって旧来の支配層である地主階 ム」的行動はアイルランドのように社会から広汎に支持される

ネットワークが果たした意義について 六世紀のギリシア語刊本に アルド・マヌーツィオの事例から! おける

菅原 真帆

運が高まっていた。 版印刷によって、それらをより広い読者層に広めようとする機 されるようになり、 ストテレスをはじめとするギリシア古典の価値は次第に再評価 はながらく理解されなくなっていた。だが一二世紀頃からアリ 西欧中世ではギリシア古典の多くが失われ、古典ギリシア語 一五世紀末になると、 新たに考案された活

古典復活に大きく貢献したヴェネツィアの出版者アルド・マ まとまった著作は残してはいないものの、 景を解明することを目的とする。 功績の一つとして知られるギリシア語作品出版のプロセスと背 ヌーツィオ (一四五二頃―一五一五) の活動を取り上げ、 ついてほのめかしているからである。 品において、 を分析することを採用した。マヌーツィオは一印刷者であり、 *Classics* (Harvard University Press, 2016) に採録された序文 オ自身が記し、N. G. Wilson, Aldus Manutius The Greek 本修士論文は、ギリシア語作品刊行の先駆者としてギリシア 名宛人へ序文を書き、 研究方法としては、マヌーツ その意図や編集事情などに 出版するすべての作 彼の

斗

ザーニのように印刷技術に貢献し、あるいはマヌーツィオの教 によってマヌーツィオはギリシア語文献を刊行することができ 出されるが、彼の「ネアカデミア」は近世における「自発的 売など様々な面においても貢献した。これらの多様な人々は人 ら集まった学生や学者たちがギリシア語文献の印刷・出版につ く、エラスムスやトマス・リネカーのようにヨーロッパ各地か 編集者というかたちで実務に携わり、様々な面で彼を支えた。 を出版することはできず、助力が必要であった。そのため があり、 たと結論した かには ミア」の活動に参加した。マヌーツィオが遺した序文のいくつ 的ネットワークを形成し、マヌーツィオが創設した「ネアカデ いて議論し、出版する作品の底本となる写本の入手や校訂、販 力するだけでなく、クレタ島出身のムスルスのように校正者や え子であるカルピ領主アルベルト・ピオのように資金調達に助 ヌーツィオは彼の周囲に多彩な人材を集めたが、彼らはトッレ の力で、 さらに、ピエトロ・ベンボのようなヴェネツィア人だけでな voluntary society」の先駆けとも見なすことができ、その力 当時マヌーツィオは、ギリシア古典刊行にはひじょうに意義 「文字の共和国 res publicae litteralis」という表現が見 主要なすべての作家やその他数多くのギリシア語刊 ビジネスとしても有望であると考えていたが、彼一人

[民族学考古学専攻]

―透閃石岩製石斧出土遺跡を中心に―石斧石材の選択と利用後期旧石器時代前半期における

鈴木 伸太朗

日本列島の後期旧石器時代前半期を特徴付ける石器である石目本列島の後期旧石器時代前半期を特徴付ける石器である石屋の一名のライフサイクルを持つことが指摘されてきた。そうした中で近年、青海蓮華地域原産の透閃石岩を用いた石斧が、他石材で近年、青海蓮華地域原産の透閃石岩を用いた石斧が、他石材で近年、青海蓮華地域原産の透閃石岩を用いた石斧が、他石材で近年、青海蓮華地域原産の透閃石岩を開いた石斧が、他石材で近年、青海蓮華地域原産の透閃石岩を用いた石斧が、他石材で近年、青海蓮華地域原産の透明石器を用いた石器である石とを研究の目的とした。

> 析、あるいは産地、諸特徴が一致する石材のサンプルを用い 種ごとに既存のデータを用いて検討を行なったが、同じ岩石種 ることも明らかにした。上記の事実は、透閃石岩製石斧の石材 し、その傾向は二〇〇㎞以上の遠隔地においてはより顕著とな ることも確認した。一方、前葉のみ分布する一〇〇㎞以遠のエ 破壊分析などを実施し、より精緻な検討を行う必要がある。 ってその性質には差異がある。今後、 として分類される場合であっても産地、あるいは採取場所によ 選択に「強度」が重視され、透閃石岩が広域に分布した要因の 透閃石岩よりも「密度」が劣る在地石材が利用される姿も確認 リアのうち、二○○㎞圏内では、透閃石岩の補完石材として、 度」をもつ緑色岩などの石材も石斧石材として好んで利用され が好んで選択されるとともに、同原産地に産しかつ同等の「密 地である青海蓮華地域から概ね一○○㎞圏内までは、透閃石岩 つとして、その「強度」が求められた可能性も示唆している。 本稿においては、石斧製作に用いられた石材について、岩石 その結果、前葉、後葉の2期を通じ、透閃石岩製石斧の原産 遺跡出土資料の非破壊分

―官衙関連遺跡の分布・立地の検討を中心に―古代出羽国南部における郡内支配の様相

皮藤 千遥

古代東北史研究は、これまで城柵を軸にした領域拡大のプロ

要素に基づいて分類したうえで、 耕地との関係も分析した。そして、 支配の特性とその変化について明らかにすることを目的とする。 されておらず、 まれた置賜郡・最上郡では、これまで典型的な郡家遺跡が発見 セスに主眼が置かれてきたが、陸奥国と出羽国では、 の関係を捉えた。また、条里遺構分布図と重ね合わせることで、 条件については主に傾斜区分図を用いて、 を含めて、それぞれの立地条件、 頭)に形成された官衙関連遺跡を抽出し、周辺の一般集落遺跡 本論では、こうした官衙関連遺跡を対象に、 される遺跡が、 に乗せて論じることは困難である。 の成立過程や在地の勢力との関係に差異があるため、 次体的には、飛鳥・奈良・平安時代 部分的な官衙的要素からなる官衙関連遺跡と称 郡内に分散していることが明らかになっている。 官衙関連遺跡を中心とした郡 時期的変遷を検討する。 官衙関連遺跡を規模と構成 創建当初の出羽国に組み込 (7世紀後半~10世紀初 遺跡と土地の傾斜と 両郡における郡内 それぞれ 同じ文脈 立地

状地上に存在するほか、 場所に位置しており、 られる。 かけて、 状地に遺跡が分散する様相がみられ、8世紀末~9世紀前半に 置賜郡では、 最上郡では、 河川を通じて郡内の物資運搬を行っていたと理解される。 この時期に成立した官衙関連遺跡は河川交通に適した 居住に適した南北の大きな扇状地にまとまる傾向がみ 郡成立時には盆地内の北、 官衙関連遺跡が、 また河川に改修を加えている遺跡の例か 盆地中央の扇状地前縁部から沖積低地 同様に盆地内の複数の扇 東、 南に存在する扇 内の遺跡分布の時間的変遷を明らかにした。

関連遺跡が形成されていることが明らかになった。 にも分布しており、置賜郡とは異なった傾向を示している。 分布の時間的変遷をみると、 8世紀末以降に沖積低 地の官 遺

両郡内の遺跡分布と変遷には違いがみられるものの、一方で

跡

体制が再編成されたことを示していると考えられる。 伴う物資・兵力の動きや交通路の変化の影響を受けて郡内支配 にみられた変化は、 体的に支配するための要所に官衙施設を造営したものと考えら それぞれの8世紀末~9世紀前半の様相は、ともに、 夷征討が行われていた頃にあたっており、 れる。この時期は三十八年戦争と呼称される宝亀五年以降の蝦 出羽国の後方に位置する両郡でも、 官衙関連遺跡の 郡内を一 勅令に 分布

建築プロセスにおける煉瓦及びその積畳方法の選択 慶應義塾創立50年紀念図書館を対象に―

良太

に基づき、生産と流通を中心とした研究が進められてい からは、 た研究は少ない。しかし、 方では、施工をはじめとした煉瓦の消費といった観点を踏まえ も増えてきている。そこでは、 から主に進められてきたが、それ以降には考古学的研究の成果 煉瓦の歴史学的研究は、一九九○年代後半まで建築学の 設計者、 施工者、 煉瓦構造物にみられる煉瓦の諸特徴 職人などさまざまな人々の建築へ 消費地で使用された煉瓦の分析 る。

がある。 関わり方を読み取れ、 そうした視点からの煉瓦研究を行う必要

象に、 周年記念図書館建設経過写真帖』や『慶應義塾図書館アルバ 館の建築プロセスを解き明かすことを目指した。その結果、 史料に加え、日誌等の未公開の図書館建築関係資料(慶應義塾 的分析という二つの方法から上記の点について検討を試みた。 明らかにすることを目的として、慶應義塾50年記念図書館を対 する。どのような立場の人々がどのように関与していたのかを 煉瓦が用いられ、どのように積まれているのかという点に着目 三田メディアセンター所蔵建築関係資料群)と、『慶應義塾50 (1)文献史料と写真資料の分析では、図書館史等の既存の文献 本論文では、 等の写真資料の内容を精査・整理することによって、 (1)文献史料と写真資料の分析、 煉瓦構造物の煉瓦の在り方、つまりどのような (2)煉瓦の諸特徴の考古学 図書

になった。 の選択、そしてそれらの積み方に違いがみられることが明らか 個々の煉瓦の色調、 の法量の比較をはじめ、成形方法や積み痕、 (2)煉瓦の諸特徴の考古学的分析では、建築部位ごとに、煉瓦 その結果、 刻印といった諸特徴の分布についての分析 建築部位ごとに、 煉瓦の種類や生産会社 破損・加工煉瓦、

らかにした。

施工者、

積の具体的な工程や、煉瓦の選択や積み方の選択に、煉瓦生産 主の慶應義塾による依頼から竣工までの経過はもとより、

設計者の一人の曽禰達蔵が関与していたことを明

様々な関係である。 が指摘できた。そこからみえてきたのは、煉瓦と人との間 の選択、 二つの分析結果からは、設計者、施工者、職人の間で、煉瓦 積み方の選択に対する意識がそれぞれ異なっていた点

学的研究の新たな可能性を開くものと考えている。 性の一端を解明できた。これは煉瓦の歴史学的研究、 れを構成する建材、そして建設に関わるさまざまな人々の関係 以上のように、本論文では、明治末期における構造物と、そ

も今後の課題として残されている。 また、民俗学的な検討 るだけでなく、他の煉瓦構造物との比較も実施できなかった。 とはいえ、煉瓦には、本論文で取り扱えなかった諸特徴があ (煉瓦工場・設計会社等の聞き取り)

十字軍期エルサレム王国における農村運営 城館を中心とした農業集落の実態

煉瓦

藤田 隆太郎

館についても単に軍事的な性格だけでない多面的な性格が明ら 議論が考古学的証拠に基づいて盛んになされるようになり、 く主流であった。しかし、一九八〇年代以降、それを批判する 十字軍国家の研究では、ヨーロッパからやってきた「フランク 人」と現地住民の間の対立を前提とする分離主義的解釈が長ら 11世紀末に南レヴァントに建設され、13世紀末まで存続した

点の提示を試みた。成果として以下の三点を挙げる。 をした農業集落を対象として、フランク人の活動に関する新視葉の比較的平和で農業活動が盛んに行われた期間の城館を中心を明らかにすることが必要となっている。本論文は、12世紀中村部において彼らの間にどのような関係性が結ばれていたのかけ高いなった。現在の十字軍国家研究では、フランク人支配の寛かになった。現在の十字軍国家研究では、フランク人支配の寛

第一に、十字軍期の農村の実態解明に向けた道筋を提示した。 第一に、十字軍期の農村の実態解明に向けた道筋を提示した。 集落における活動を総合的に復元することの可能性を示した。 集落における活動を総合的に復元することの可能性を示した。 集落における活動を総合的に復元することの可能性を示した。 また、その切り口として、農産物加工設備の領主の独占権を念また、その切り口として、農産物加工設備の領主の独占権を念また、その切り口として、農産物加工設備の領主の独占権を急また。 第一に、十字軍期の農村の実態解明に向けた道筋を提示した。

第二に、十字軍期に特殊な状況を考慮できるように、アプリ第二に、十字軍期に特殊な状況を考慮できるように、アプリを記し、十字軍期に特殊な状況を考慮できるように、アプリカリに議論されていた環境情報や農産物加工プロセスを整理した。12世紀の古気候の検討に基づく栽培作物の同定、ギブソンを選出、

物加工を分析し、フランク人と現地住民の活動を考察した。イティン遺跡とベルモント遺跡を対象に農業集落における農産第三に、上記の方法を実現するケーススタディーとして、ベ

家内制農産物加工の痕跡があることも同時に示した。った。城館は領主の生活のための空間であることが確認され、館で収穫物の一部を徴収して貯蔵していた可能性が明らかにな点在する水利施設や大規模な農業加工設備の整備を主導し、城点を大規模な農業加工設備の整備を主導し、城京の外に

史 学 第九〇巻

_
$\overline{\bigcirc}$
一〇年度卒業論
文題目

日本史学専攻

近世の出版統制について

イエズス会のインド―日本布教 -故きを温ねて新しきを知る―

メセナ」の源流を探る -地域認識からの一考察--

ヤミ市再考

リーダーシップ論から見た松下幸之助と稲盛和夫

浅田

大輝 裕平

橋本

大谷

馨

伊藤詩穂子

-近代の企業家による文化・芸術支援の検討

戦前期製菓業の経営者を取り巻く者たち -史料と文学作品から-

全国清酒品評会の影響と役割

森永製菓・明治製菓を比較して―

大山

真輝

井垣

莉保

-伏見酒造組合の活動を通して―

宝塚歌劇の優位性

平松

里菜

転居広告の分析

Ш 口ひかる 清水

悠

戦後における少女雑誌 松竹歌劇と比較して-『少女クラブ』 『少女の友』を中心に―

文献資料に現れる葬儀に関する儀礼

軍事関係文書から考える鎌倉幕府滅亡 男性聖霊と女性聖霊の葬祭の比較検討

吉田

浩輔

悪人」としての松永久秀

『年中定例記』における故実と猿楽の武家奉公の実際

疋田

Ħ

勇樹 悠真 小澤

清佳

戦国期における年紀法の形態について 町

古代日本における男女それぞれのジェンダー 鎌倉寺院の仏事から見る頼経と北条氏の権力関係について 観 朝井 武藤 睦典 萌

律令成立期以降における医師についての検討 日本古代における歌垣と人妻の性関係 小林 高畑 太一 長子

古代日本における水害対策の変遷 『日本霊異記』の編纂と中国仏典説話の関係 山川藪沢や国司・郡司との関係性を中心に― 本田 野部

古代日本における馬・牛の表象

明治期御蔵島の経済構造と命令航路指定 戸田漕艇場建設と荒川治水

小林

慶

片

大島

亜希 京香 里菜 絢子

九〇〇~三〇年代日本の修学旅行と植民地

明治・大正期の専門職の職業観と広告戦 台湾と朝鮮・満州の比較を中心に― 略

Ш

崎

哲哉

占領期閉鎖機関の分割再編 小野

嘉己

日本出版配給株式会社の事例 小林

英智

九三二年東京市域拡張と上水道市営化

日本宣伝文化協会による統制

太平洋戦争下の広告業界

航

斎藤

旧 雄琉 一	英領インド・英領マラヤとの比較 一神戸市と天津市を事例として 日中友好都市交流	土産品の創出を通して 「旅行満洲」に見る郷土化への模索 「旅行満洲」に見る郷土化への模索	一九三〇年代上海の『申報』広告と消費者の「国貨」【東洋史学専攻】	―大宮駅の事列― ――大宮駅の事列― ―――――――――――――――――――――――――――――――――――	朝鮮総督府の政策決定と植民地官僚	―日本サッカーリーグにおけるクラブと企業の関係戦後日本の企業経営とスポーツ	―春木競馬場の廃止と岸和田市― 一九七〇年代都市郊外の再開発と生活環境	―一九〇〇~一九一〇年代の帝国博品館―民営期の勧工場経営と競争戦略	―一八九〇年秋葉原貨物線敷設の事例―都市中心部の鉄道忌避	―玉川水道株式会社の事例―
	霜篠魚原	大 浅 利 原 月	一 利	業集貫	那須	関 係 —	戸嶋	塚越	溪口	佐伯
『中外日報』にみる中国人遺骨送還事業 『中外日報』にみる中国人遺骨送還事業 『中外日報』にみる中国人遺骨送還事業 『中外日報』における国家と国民形成――エジプト一月二五日革命における民衆運動と国民・変化 変化 性・ナショナリズム・フェミニズムの交差―フランスが見たアルジェリア・カビール社会 ―慣習法集の分析をもとに――一九六〇年代エジプト地方社会におけるミート・選初における郡国制の一考察 量尤神の性質について がザーリーにおけるスンナ派思想構築 ―信仰の確信追求を中心に― 香料薬種商アッタールと中東の香り文化 「四世紀アルハンブラ宮殿に見るイスラーム・スの特質	拓 歩 月	迅 悠 沙 貴	馬	隆 文	訳 太 朗		隆 介	梨奈	雄琉	翔
	ルア確し	がザーリーにおけるスンナ派思想構築蚩尤神の性質について、実際のではける郡国制の一考察	「イスラーム国」の広報戦略―機関誌におけてスラーム国」の広報戦略―機関誌におけ	車を中心に見た一月二五日革命後のエジプト銀行の意義の再検討──九六○年代エジプト地方社会におけるミー	―慣習法集の分析をもとに― フランスが見たアルジェリア・カビール社会	性・ナショナリズム・フェミニズムの交差委任統治期パレスチナにおける女性をめぐる	変化 エジプト一月二五日革命における民衆運動と	―国籍法、外国人労働者、国土形成― 湾岸諸国における国家と国民形成		『中外日報』にみる中国人遺骨送還事業
	ム・スペイン 飯島美乃里	宮 堀 ラ田 ፲	りるプロパガーを変える。	の政治変動田所	坂本七海子	— 和田野	国民意識の	向井	李	神中

オスマン帝国治下の特権的商人—一八世紀後半から一九

女性

横田 朱美

―ジョン・クインシー・アダムスの事例から― 豊岡ぽおら		トルコ絨毯からみるウシャクとヘレケ、アナトリア農村
一九世紀前半のアメリカ合衆国におけるキリスト教観	健人	ける民衆のすがた
ッハの初期思想に見るヘーゲルからの変化― 轟 英美		フッガー通信にみるオスマン帝国一五八二年割礼祭にお
一九世紀におけるドイツ観念論について―フォイエルバ	光希	―イスラームは女性蔑視的な宗教か― 野沢
塩田 麻衣		クルアーンから見る女性
四〜五世紀における教会著作家たちの皇帝観について	葉希	―ヒュッレムの事例を中心にして― 高田
―A・W・N・ピュージンの事例から― 小西 智子		トプカプ宮殿のハレムで暮らす女性の在り方
一九世紀イングランドにおける中世的建築の理想と現実	美乃	世紀イスタンブルの水路建築の関連性について 城戸
―ラッキーストライクの例から見て― 唐沢静里香		イスラーム世界における水に対する理念と一六世紀~一八
二〇世紀前半のアメリカにおける広告効果について	舞	―医学、宗教、民衆、そして権力者― 加藤
an History of Dancing" の解釈を中心に― 小澤 里佳		中近世中東世界のペスト流行をめぐる解釈と困難
ジョン・ウィーヴァーのダンス論—"An Essay Towards	拓己	性について―ムカルナスを中心に― 山崎
ク=ウォルトの事例から― 榎本 大雅		一四世紀アナトリア圏のイスラーム建築における幾何学
の誕生―オートクチュールの祖シャルル=フレデリッ	拓希	大塚
一九世紀パリにおける〝ファッション〟という付加価値		一六世紀初頭におけるコーヒーとコーヒーハウスの適法性
―フレデリクス二世のムスリム強硬政策から― 藤井 和哉	穣	―自由主義社会との関係を中心に― 西村
中世シチリア王国における宗教的寛容		現代イスラーム世界における女子割礼文化
海軍の改革 菊地 桃子	英奈	松村
ジョン・A・フィッシャーと二○世紀におけるイギリス		ティムール朝の宮廷書画院キターブハーナの実態と機能
千保木 逸	弘樹	ハンマームの信仰性と非信仰性 北條
ナポレオン一世支配下のスペイン・ナショナリズムの興隆	優香	生観の検討―宗教とは何か― 奈良
[西洋史学専攻]		九~一一世紀におけるシーア派少数派分派の教義及び死
	美穂	世紀前半における対ヨーロッパ関係の変容― 中西

田外の村物上田制田は	古代ローマ帝政期における持参金に関する考察中山 一妻の死後の取り扱いを中心に一 ・夫ス政権下(一九三三~一九四五年)における旧博物館(Altes Museum) カランコ体制下のスペイン観光業におけるパラドールの役割 ・一八世紀イタリア都市における慈善と女性・ファイレンツェ・トリーノの事例からー・フィレンツェ・トリーノの事例からー・フィレンツェ・トリーノの事例からー・フィレンツェ・トリーノの事例からー・フィレンツェ・トリーノの事例からー・フィレンツェ・トリーノの事例からー・カーの世紀イタリア都市における慈善と女性・カーの世紀イタリア都市における慈善と女性・カーの世紀イタリア都市における慈善と女性・カーのでは、カースを表情を表情を表情を表情を表情を表情を表情を表情を表情を表情を表情を表情を表情を	真 日 英
中島と関する。	中島アウグストゥスの個人的考えから読み解く食糧供給の意図――動産賃貸と交換経済に着目して――――――――――――――――――――――――――――――――――――	年代~一九六○年代を中心にドイツの経済発展とその要因
常 義 優太	古バビコニア時代におするビジネス形態に関する再合がビコニア時代における剣闘士競技の意味 一兵士にもたらした勇敢さ― アレクサンドロスを支えた偉大な占い師― 川アリスタンドロスの歴史的意義	フランス革命と女生権 度量小至合 度量小至合 できた女性 間にある文学的互恵関係をめぐって』より―― 荒濤 理沙文化的原則―著作『スラヴ民族の様々な種族と方言のヤン・コラールが思い描いたスラヴ民族の使命と新しい 三浦里佳子
小林 美織 蘇子	門を通して―ロパガンダ	一八世紀後半~一九世紀におけるイギリスの日曜学校一九世紀フランス社会と劇場芸術の関わり― 西田 桜子パリ・オペラ座の時代―オペラ座に見る一八世紀後半~

が目指した「保育学校」(cole maternelle)における

帝政前期ガリアにおけるブドウ栽培

宗新に谷	産業革命期イングランドにおける犯罪の傾向についてう人物について 武田	から見たヒューバート・ウォルター	嶋田	英国競馬に見る上流階級と労働者階級間の壁の変化	佐伯	Functions of Mele during the colonization of Hawaii	グランドの城 白土	ノルマン・コンクエスト後から一二世紀における、イン	―イブン・ファドラーンの『報告書』から― 北原	ルーシの信仰	に見る移民	一九八〇年代フランスにおける郊外と、「ブール文学」	ス神話」の創造を手がかりとして― 袴谷	アリズムを真に崇拝したか―ラグビーの分裂や「エリ	一九世紀末のイングランドにおけるラグビーはアマチュ	衛生観 根岸	一九二〇年代アメリカにおけるアイボリー石鹸の広告と	鉄道の発展、および人口移動 照沼	一九世紀後半から二〇世紀前半におけるニューヨークの	佐藤	低年齢児教育―教育観とその背景にある幼少期の経験
那 々	仁志		慎也		南美		耕平		祥乃		和希		優介			達生		大河		佑衣	
―テ・アワ・トゥプア法の事例から―ニュージーランドのワンガヌイ川に関する研究	マロン派典礼改革に見られる伝統観―街並み変遷の分析をもとに―	西荻の特長	―ニネヴェ北宮殿出土の彫刻壁画を対象に― 生	アッシリア帝国期の彫刻壁画における宦官	に見るその関係性	第一次テトラルキア期の四帝たち:ラテン語碑文の称号	―古人口学の手法と江戸市中人口を踏まえて―	関東近世女性人骨における耳状面前溝発達度	―製造と演奏の面からの考察―	日本におけるサキソフォンの変遷	―甕棺墓制を中心に―	弥生時代中期北部九州の社会構造	〔民族学考古学専攻〕		ブレクジットの理由についての考察	グランドに与えた影響―	ノルマン人と城砦建築―ノルマン・コンクエストがイン		農民から見るイギリス封建制の崩壊と、社会階層への影響	―一五~一九世紀のバルカン地域―	ついて
高	森中村		佐藤エレナC		山崎	の称号	中村		中村		寺 村				山本	富永	がイン	大高	の影響	北條	
美貴	美		レナ C		雅		謙伸		怜央		美 南				武留	航大		千奈		円久	

接触領域としてのケ・ブランリ

―展示活動の歴史研究から―

国立大学町における郊外住宅地の形成

多摩川の歴史に関する研究 造形物から見るソロモン諸島

アボリジナル・アートの文化資本化

TMT建設抗議運動から紐解くネイティブ・ハワイアン ―エミリー・ウングワレーを例として―

モアナと伝説の海』からみるポリネシアの文化英雄マ のアイデンティティーの再構築 下田明日香

古代畿内、南河内地域における水利施設の運用 日本におけるアーユルヴェーダの受容と実態 日本で生きるトンガ王国出身ラグビー選手 本橋 原田有里子

怜子

縄文時代の仮面遺物について 一四・一五世紀武蔵における板碑生産工房に関する考古 学的研究―種子・蓮座・花瓶表現に着目して― 小山 堅登

近世埋葬遺構出土の櫛に関する考古学的研究

立山の山岳信仰遺跡と立山曼荼羅の研究 -使用方法の性差を中心に―

> 池 田中 拓樹 祐壮

宇尾野莉那

小倉 孝太

京墓 歩惟

鶴井 彩央

吉川 中田 怜里 明花

杉本 佳実

横川

正明